『一人ひとりが「リーダー」であるということ』

弁護士法人淀屋橋・山上合同
山口　聡子

今回このような形でコラムを書く機会をいただき、「リーダーシップとは何か」ということについて、改めて考えてみました。

私は弁護士として、企業や公的機関、ベンチャーや外資系企業など、さまざまな組織と関わる機会があります。内部のやりとりを部分的に見ることもあれば、業務の一環として現場に加わることもあり、法務以外の視点からその活動に触れることもあります。

組織の文化や風土は本当に多様で、それぞれに特色がありますが、リーダーシップという観点から見ると、ある共通点があるように感じています。それは、「一人ひとりが、自分に何ができるか、何をすべきかを考え、実行している」という点です。「リーダー」という言葉には、どうしても「全体をまとめる人」という印象がつきまといます。ただ私自身は、必ずしもそうでなくてもよいのではないかと考えています。「その場における、自分の役割を意識し、周囲とコミュニケーションをとりながら、一つひとつを着実に実行していく」そうした姿勢も立派なリーダーシップの一つではないでしょうか。

学生の教育に携わるなかでも、「リーダー＝目立つまとめ役」と捉え、自分とは無縁だと感じてしまう人は少なくありません。しかし、まとめ役でなくても、それぞれが自分なりの形で責任を果たし、組織に貢献していくこともまた、大切な「リーダーの在り方」だと思います。

私自身、弁護士という立場から物事を俯瞰して見てしまうことがあります。それが役に立つ場面もあれば、距離を感じさせてしまうこともあります。まだまだ至らない点ばかりですが、関わる組織や依頼者の方々の中で、自分なりのリーダーシップをどう発揮できるかを考えながら、これからも努めていきたいと思っています。